

企画展

あがりこの生態と
人々の関わり





只見町、柴倉山山麓の薪平に見られるあがりこ型コナラの林

はじめに

温暖多雨の気候条件の下、日本列島においては豊かな森林が発達していた。日本列島に人類が登場して以降、人々はこうした森林を利用し、狩りをし、農耕を行い、森林を切り開き、その資源を利用しつつ生活をしてきた。その利用形態は様々で、文明が発達するにしたがって極めて破壊的になり、森林は変質し、また、失われてきた。そうした森林の利用履歴は、今日の森林の姿に色濃く反映されている。

例えば、ブナ天然林を伐採した後には、ブナの二次林が形成されるが、この二次林を薪炭目的で短い周期で繰り返し伐採すると次第にミズナラの二次林へと推移していく。さらにそれを繰り返すとコナラの二次林になる。一方、放牧・採草目的で、原野に火を入れると、その後に再生するのはカンバ類を中心とする二次林である。言い換えれば、今日の森林の姿は、過去の土地利用の歴史の所産である。

一方、こうした人為の影響は森林の姿にとどまらない。樹木を伐り尽し、更新によって再生した森林を利用するだけでなく、樹木の一部を利用目的にしたがって伐採利用し、個体の維持を図りながら、これを長期にわたって利活用してきた歴史もある。その結果、生まれたのがあがりこ型樹形（ポラード＝Pollard）である。只見地域にも、あがりこ型樹形のブナ、コナラが見られ、人々の暮らしを今に伝えている。こうしたあがりこを理解するために、この企画展では、広く、日本のあがりこを紹介、解説する。



あがりことはなにか？

「あがりこ」とは、東北地方を中心に使われる言葉で、木の幹が地上2-3mのところまで太くなり、そこから多くの幹が出ている状態の樹木をいう。主にブナの木に対して用いられる。これは早春、締まった雪の上で幹を伐採し、萌芽再生した幹を繰り返し利用したためできた樹形で、樹木の根元より上（あがり）に発生した萌芽幹（こども）からその名が来ているものと考えられる。こうした萌芽更新法は、地際での一般的な萌芽更新法と区別して、頭木更新（台伐り萌芽更新）と呼ばれる。こうしてできたのが「あがりこ」ないし「あがりこ型樹形」と呼ばれるものであり、英語では Pollard である。一般にあがりこは、ブナをさすが、あがりこ型樹形は広葉樹、針葉樹を問わず様々な樹種で見られ、世界的にも普遍的な利用形態である。



あがりこ型スギの巨木

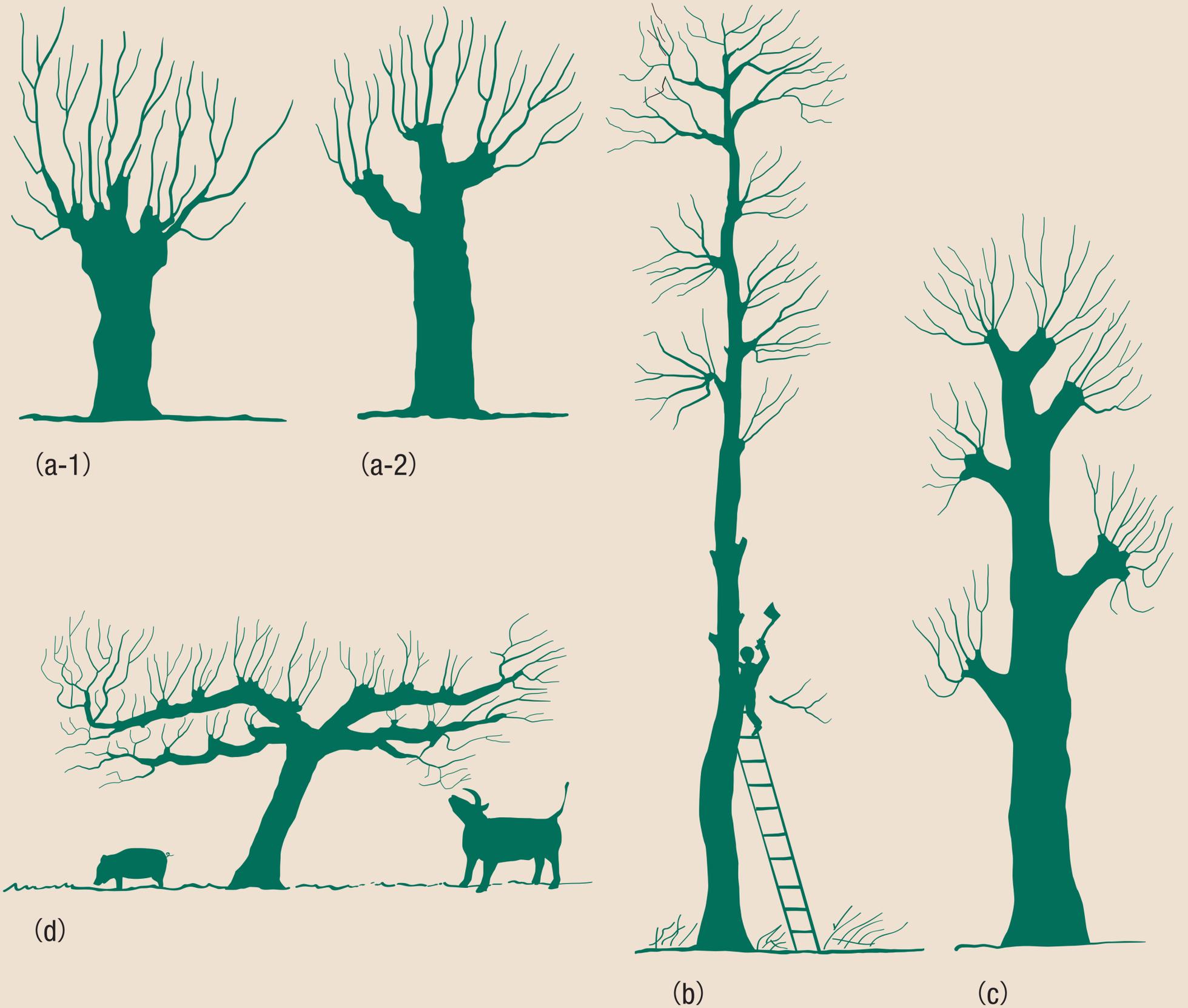


あがりこ型コナラ（柴倉山薪平）



畑地に栽培されるクワの木

台伐り萌芽による利用方法



あがりこの形態

「あがりこ更新」すなわち「台伐り萌芽更新」は、地上部で樹木の一部を伐採し、その萌芽幹、萌芽枝を繰り返し利用する施業で、様々な形態が見られる。ブナのあがりこは、地上部2-3mで主幹を伐採し、そこから発生した萌芽幹を複数育成し利用する (a-1)。また、その変形として、台伐り萌芽した数本の幹をさらに台伐りし、そこから発生する萌芽幹を繰り返し利用するものもある (a-2)。一方、主幹は伐採せず、幹の成長にともなって発生する枝条を落とし利用する形態 (b)、また、その変形として高い位置で主幹を台伐りし、その間に発生した太枝の基部を残し、そこから発生する枝条を利用する形態 (c) などもある。少し変わったところでは、地上2-3mのところ台伐りを行い側枝を伸ばし、その上に発生する枝条を繰り返し伐採利用するものもある (d)。これは日本では果樹栽培における樹木の剪定で広く行われているが、目的が異なる。



萌芽幹枝を繰り返し伐採されたために、幹が肥大し瘤状になったあがりこ型ブナ
(只見町蒲生、真奈川出合)



枝を落とされたケヤキ



菊炭生産のために台伐りされたクヌギ
(兵庫県猪名川町)

あがりこの形成過程

「あがりこ」は、地上の高い位置で主幹、側枝を伐採し、そこから発生する萌芽幹枝を繰り返し伐採利用するなかで、独特の樹形を形成する。ここではブナのあがりこを例にその形成過程を紹介する。

最初、対象となる個体を地上2-3mの位置で伐採する。その際、太い枝を残し伐採することが重要である。この伐採あとから定芽由来の萌芽枝が多数発生し、そのいくつかは主幹となって立ち上がる。萌芽には二つのタイプがあり、一つは定芽と呼ばれる幹に休眠状態で内在する枝の芽であり、もう一つは形成層からカルスが形成され萌芽枝となって成長するものである。多くの場合、定芽由来である。こうした萌芽幹は、利用サイズに達すると1本を残し、伐採利用する。この残された幹を立木と呼ぶ。これを繰り返し行うことで、伐採跡が瘤状化し、幹が伐採位置で肥大する。こうして出来た樹形がいわゆる「あがりこ」である。

ブナの萌芽力は幹が太くなるにしたがって落ちるため、立木についても、サイズが大きくなると、伐採し、別の細い幹を立木に置き換える必要がある。一方、伐採位置までの元幹は、普通の樹木の幹の成長とは異なり、多数の萌芽幹を維持するため肥大化するのも特徴の一つである。